

■ 2007 年度 卒業論文要旨 ■

横浜線の掲げる看板：

J R 横浜線が横浜北部に与えた影響

石田 梓

東京都江東区南砂地区における短期間内での人口増加の背景とその影響

板橋 まりえ

東京都江東区では、1997 年から 2007 年末現在まで一貫して人口が増加している。地域毎にみると一定期間で急増するパターンが多く、これは民間分譲マンションの急増が原因である。工場の撤退による未利用地の増加は公共集合住宅だけでなく、民間のマンションの建設も増やし、江東区の歴史はその規制と緩和の繰り返しであった。近年は特に若いファミリー層と児童の人口が増加したため、区内の一部では学校等の公共施設への受入れが困難になるなどの影響が出ている。

そこでこの変化の詳細を確かめるために、1 年毎の人口集計結果が得られる住民基本台帳をデータに用いて、区内の一部の地域について重点的に調査した。調査地域には、他よりも数年遅れて人口増加が始まった南砂地区の中でも急激な変化が起きている新砂 3 丁目を選んだ。ここでは、未利用地が広がる土地から多様な都市機能を持つ開発地域へと変貌し、大規模マンションの建設が相次いで、20 人に満たなかった人口が 5 年間で 4500 人に増加するという変化が約 10 年間で起きている。この南砂駅周辺は、区の計画的な整備事業の結果として居住環境の質が向上した上に建築規制が緩くなっており、低価格の大規模民間分譲マンションが集中し、交通の利便性もあって若いファミリー層を中心とした転入者が集中した。その結果、付近の小学校は受入れが困難となった。また、付近の交通機関

の混雑につながっていることや、住民の構成に差がある集合住宅コミュニティが近接していることなど、小スケールでみてこそその問題点もみえてきた。

人口その他の資料を細かく分析した結果見えてきた新砂 3 丁目の様相は、江東区全体の人口増加の様相と共通する点が多く、小さなスケールの地域内において短期間で急激に起きた変化の集合の結果が、江東区全体での変化であることを確認した。区は高齢者が増加することは予測していたが、一定期間に児童人口が増加することは予測できなかったと考えられる。その予測できなかった事態の発端が、区による開発であった。

東京における高級住宅地の形成と変容：

田園調布、成城、常盤台を事例に

上藺 栄衣美

(本誌 pp.98 ~ 109 にフルペーパーとして掲載した。)

地域学で再構築される地域イメージ：

「会津学」の活動を事例として

久島 桃代

近年全国各地で、地域学・地元学と呼ばれる活動が盛んである。住民達が地域についての理解を深めていくことが地域学・地元学とされる。そしてこれらの活動の報告書を読むと、どの活動でも住民達が自分たちの地域に注目した結果、活動以前とは違ったイメージをもって地域を捉えていくようになっていることが分かる。

ならば従来「後進的」・「貧しい」または「異境」といったイメージをもって語られることの多かった東北地方において、地域学はどのような役割を果たしているのだろうか。この問を追究するため、本研究では福島県会津地域を中心に活動を行っている地域学「会津学」

の活動を検証した。「会津学」は地域誌の編集・発行を活動の中心に据えており、会員たちがどのような意識をもって会津という地域を見つめているかは、地域誌『会津学』のレポートの特徴によくあらわれている。そこで本研究では、『会津学』のレポートの特徴を検証した上で、実際に「会津学」の活動を観察し、会津の地域像が再構築される過程を追うことにした。

『会津学』は、執筆者たちの生活の内部から見た会津の姿や、すぐ側で生きる人の言葉を記録することを重んじる地域誌だ。そうした姿勢の背景には、会津の生活を次の世代へ継承させたいという思いと、会津で生活する自分自身への作り手たちの思いがある。そのような姿勢と思いにより、それまで他者によって語られがちだった会津の地域像を、会津と深くかかわりながら生活している執筆者達に取り戻していくということが起きている。

また地域誌『会津学』は、会津の姿を忠実に記録することにより、会津の多様性も明らかにした。その結果、これまで一体だと思われてきた「東北」という枠組みも揺らいできた。このことは、それまで日本の中で「辺境」と見なされてきた「東北」という単位について、もう一度再考する必要性があることを示している。

地図と気象データに見る満洲開拓：
ある信州女性の開拓地を事例として

後藤 安里

長野県では満洲開拓に行った人が最も多かった。したがって県内では満洲開拓に関する記事や著作、講演が現在でも多い。

しかしその多くは個々人の逃避体験を基にしたものである。それゆえに、実際に満洲の気候環境がどのようなものであったか、という視点が抜け落ちたまま語られている。つま

り聞き手あるいは読み手には、満洲がどのような気候環境にあり、どのような気候環境の下で開拓民が開拓していたかについて、限られた情報しかなく、当時の満洲の地理的視点が欠けたまま伝わっている。

そこで本論文では、満洲の地図と気象データを掘り起こし、当時の気候環境について事実を見ていく。その際、比較のために当時の満洲の気候環境が長野県と比較してどのような違いがあったかに焦点を当てる。

事例として、長野県の下高井郡出身の女性、高山すみ子さんが開拓された、満洲国の東安省宝清県万金山開拓団高社郷（以下、高社郷）を取り上げる。そのために本論文では、一つ目に満洲国や満洲開拓について概要を見ていく。二番目に長野県が全国的に被害の大きかったことについて述べる。三番目の下高井郡について、高社郷の経緯を追っていく。

四番目に高社郷の五万分一地図を用いて当時の地形や位置を見ていく。次に高社郷に最も近い気象観測地である宝清観測所の気象観測データを、高山さんが長野で暮らしていた下高井郡の瑞穂村に最も近い観測所である飯山観測所と比較する。そして下高井郡の開拓民はどのような環境の中で開拓をしていたのかを気象データから明らかにする。さらに高山すみ子さんに焦点を当てる。

高社郷の事例を見た上で、満洲開拓は開拓民にとって悲惨な結果となったが、それを後世の人が知る上で、現在漠然としている満洲の地理的情報を改める必要があると提案するものである。

日本の先祖祭祀と仏壇の変遷

齋藤 麻衣

筆者は幼い頃から祖父母の家で仏壇と親しんできた。祖父母はいつも「ご先祖様」に敬意を持って仏壇と相對していた。しかし他所の家ではどうなのだろうか。本論文は、仏壇